

# ケースのツボとそこに 合わさる言葉（3）

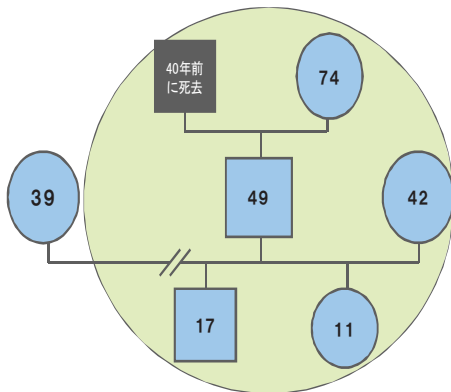
岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

## （1） 家族関係図から

いつものようにインテイクされた初診情報をもとに家族関係図を作成し（図1）、それを眺めながら家族への思いを巡らす。

X-23 清掃会社を興す  
X-19 結婚  
X-17 長男出産  
X-12 離婚 親権は実父、同居の祖母が養育。  
X-11 再婚 長女出産



「祖母は34歳の時、9歳の息子をかかえて寡婦となり、再婚せず子どもを育てている。苦労したぶん、祖母と実父のつながりは強いだろう（少なくとも祖母の思い入れは深い）」

「実父は26歳で会社を興し身を粉にして働いたと思うが、多忙で疲れた夫と10歳年下の妻の関係はどうだっただろう。そのときの実父の体験は、再婚した家庭に生かさ

れているだろうか」

「実父が親権をとったということは、実母の養育が離婚の原因となったのではないか。あるいは、祖母との折り合いが悪かったのか。後者なら、再婚後も同じことを繰り返す可能性がある」

「再婚によって祖母は孫を奪われたのか、それとも子育てから解放されたのか。長男は誰と暮らしたかったか。どんな家族構成でスタートするかは、どういった話し合いで決まったのか」

「再婚した女性は、長男と養子縁組をしたのか（養母か継母か）」

「仕事から厳しくて体罰も辞さない一方で、家のことは女性にまかせっきりという父親ではないだろうか。そうなるとう青年になった長男との衝突が考えられるが、そのことは今回の問題の背景にありそうな気がする」

「三世代家族の軋みはどの関係の揺らぎで吸収されていか、実権はだれにあるか」

家族への関心を高め、これらの疑問への自分なりの回答を用意する。いずれ面接で明らかになることばかりだが、前段階だからこそ自由にイメージが膨らむ。それは、この家族への臨床的興味と援助意欲の高まりへとつながっていく。

## （2） こんな家族だった

実父は工業高校を卒業し、土建会社や産業廃棄物処理会社で働いた。高校時代に他校生徒と暴力事件を起こして停学になったことがあるなど気性は激しいが、まじ

めで会社での評価は高かった。当時、食事など身の周りのことは同居の祖母が行っていた。

26歳で独立し、清掃会社を興す。その後、仕事仲間から紹介されて10歳年下の実母と結婚。(祖母とは別居)。ところが、二十歳をすぎたばかりの実母は子どもを車に残してパチンコに興じたり、何社もの消費者金融から借金して無断で外泊するなど、養育のネグレクトを続けた。そんな妻に夫は暴力をふるうようになり、二人は本児が5歳の時に離婚した。

引き取って育てた父方祖母は、実母を憎むあまり、繰り返し「母親の借金と浮気のせいで両親が別れた」と本児に言って聞かせた。一方父親は、借金返済と仕事に忙しく、ほとんど子どもの顔を見ない状態であった。

やがて建設関係の仕事が軌道にのり、父親は会社で経理をしていた女性と再婚。二人の間に生まれた子どもが3歳になったとき、実父の強い希望で祖母と本児を引き取った。そのとき、本児は小学校3年であった。

継母は、二人の子どもの世話と経理の仕事を黙々とこなした。しかし、注意されても自分のやり方を変えない本児と強迫的に頑張る継母との間には徐々に緊張感が増していった。

中学生になると本児は学校をさぼってゲームセンターに入り浸り、2年からは金銭持ちだし・万引き・原付の無免許運転が始まった(補導歴はない)。ふだんほとんど接しない父親は、問題が起きたときだけ継母の制止を振り切って殴った。そして中3の秋、彼は家を飛び出し友人宅に転がり込む。その家族とは長い付き合いがあり、礼を尽くして好意に甘えることになった。

このような状況で、継母との相談面接が始まった。その後、本児は頑張って卒業し、自分の意志で県外の全寮制の高校にすすんだ。このときの相談はここで終わった。

それから2年以上たったある日、継母が以前と同じように一人で来談しその後の経過を語った。高校に入学して半年くらいは、学校でも寮でも目立たない生徒だった。1年生の後半から急に身長が伸び、所属していたバスケットボール部で頭角を現し、2年では中心選手となった。そして県大会で大活躍し、3年になってバスケット部のキャプテンとなり、学校でも注目される存在となった。

身長と同じテンポで態度も大きくなり、寮での規則違反が目立つようになった。寮長は、それに体罰で応えた。

そしてついにつかみ合いとなり、寮長にケガを負わせ、自宅謹慎の処分を受けるに至った。

母親との面接が3回続いたのち、家族合同面接が実現した。

### (3) 診察室で

緊張気味の父親は、本児を前にして「息子はおだてられて調子に乗ったアホウだ」と吐き捨てるように言う。たちまち、部屋の空気は凍りつく。すかさず継母が、夫(実父)の一方的な言い方をたしなめつつ、寮の生活が息苦しかったのではないかと取りなす。それをうけて、本児は退学になっても別にかまわないとうそぶく。それを聞いた父親がいきり立つ、といった具合で面接がすすむ。

まるでストリートバスケット3on3のように3人でボールを回す様子には、息苦しい緊張の中でも決して致命的な決裂に至らないわきまえがあるように見えた。ただいつまでも続きそうだったので、タイミングを見計らって外から本児にボールを投げてみた。

「県のリバウンド王なんだってね?」「(本児)まあ。」「リバウンド王ってみんなそうなん?」「(本児)??」。」「キミも、デニス・ロッドマンや桜木花道みたいなタイプ?」「(本児)誰っすか、それ。」「うそお、知らんの?態度のでかい超有名なスターを。」「(本児)さあ、どのチームっすか?」。

すかさず、「おまえ、スラムダンク、知らんのか」と、父親が入ってくる。先ほどまでとは違って、いい表情である。そういえば、花道のチームメイトでセンターバックのゴリに似てなくもない。父親と私は、ひとしきり、ひと昔からふた昔前のNBAやスラムダンクの話で盛り上がった。実際、楽しいやりとりだった。横の本児は「わけがわからん」といった表情だが、不快感はない。継母は本児をそっこのけに弾む話にイラっとしたようで、軽く夫を諷める。かまわず私は、3on3に戻らぬように話を続けた。

すると、本児が「自分は、本当はダンカンみたいになりたい」と割り込んできた。「ダンカン?」、父親が尋ねる。「たけし軍団の?」と私(予想外にウケた)。そこからは、彼のリードでバスケットの話が続く。継母は動かない。ダンカン Tim Duncan とは、サンアントニオ・スパーズのパワー・フォワードだそうで、わたしたちはしばらく現役のNBAスター選手の話に耳を傾けた。

いい感じにこなれたところで、父親に話を振る。「自分のことを必要としている人がいる、その種の気持ちの大切さは会社を経営しておられるとおわかりですよ。お父さんなんか、頼りにされたら何だってしてあげたくなるタイプと違いますか?」。ちょっと驚きながらも、父親は力強く頷く。次いで継母に、「お継母さんだって、みんなから頼りにされているからこそ、こうやって孤軍奮闘しておられるわけでしょ?」と振る。わが意を得たり、と微笑む。

「リバウンド王はどう?」とむけると、彼はボソボソと部活での様子を話す。「そうか、やっぱりキミもそうか。頼りにされ、必要とされ、任されている感じ、そういうの、いままでに経験したことあった?」。「(本児)ない」ときっぱり。「そうか、生まれてはじめて、生きるってこういうことか、みたいな感じを味わったんや。ねえ、どんな努力をしたの? そんなふう、あてにされるプレイヤーになるために」。彼はクラブでのキャプテンの仕事とかクラスでのけんかの仲裁などを身振り手振りで生き生きと語り、両親はじっと耳を傾ける。

「(両親に)きつと生まれてこの方、家で頼りにされたことなんかなかったから、でしょう? だから、クラブや教室での感触を寮という生活の場でも確かめてみたくなかったんじゃないかな。仲間と同じように、大人に対してもこれでイケるのかどうかを。(彼に)どう?」。「(本児)う〜ん」。「もしかして、少々ルールを破っても自分を必要とする空気はみじんも揺るがない、そんな手応えが欲しかったのかなあ」。「(本児)そうかもしれん」。「ただ、身体がでかいぶんだけ揺さぶり過ぎたみたいだけど(笑)」。彼よりも先に、両親が頷いた。

「(本児に)ねらいはいいと思う。すごくいい。全然間違っていない。方法はうまくないけど。不思議に思うのは、せっかくそこまでやったのに結果を確かめていないこと。どうして?」。「(本児)??」「いま、キミのいないバスケット部はどんな成績をおさめているか、キミがいない寮やクラスはどんな雰囲気になってるか。バスケット部員、クラスメイト、寮長、先生たちは、キミが抜けた穴をどんなふう実感しているか。知りたくない? 自分の値うちを」。「(本児)知りたい!」。「そうよね、その目で確かめるには、どうしたらいいかな」。「(本児)やっぱ、寮の先生にあって…謝る…」。「うん、そこからだよ。やる?」。頷く。「これで、今回のことはキミの値うちを確かめる絶

好のチャンスになったわけや」

#### (4) ツボ

父親の「軽薄なお調子乗り説」、学校や寮長の「テングになった説」を受けて、本児は「自分は取るに足らない男説」に傾きかけていた。わたしがどれかにくみすると、それで決まりという雰囲気だった。そんな状況のもと、彼を「リバウンド王」と呼んだ。そして、普通にデニス・ロッドマン(80~90年代に活躍、狂気のリバウンダーと称された)と桜木花道(90年代に一世を風靡したマンガ、スラムダンクの主人公)を連想し、そう口にした。

彼自身は、字義通りリバウンドの名人と受け取った。それは「取るに足らない男」の対局にあり、受け入れやすいものだったと思う。父親は、リバウンド王→デニス・ロッドマン・桜木花道→「やんちゃ」と連想し、その先に若かりし頃の自分自身がいたのではないだろうか。

父子ともどもリバウンド王が腑に落ちた流れの中で、スラムダンクのストーリーと重ねながら、わたしは彼にプレイヤーの値うち、人間の値うちを語った。そして、いまの自宅謹慎は自分の値うちを確認する絶好のチャンスという方向に話を進めた。父は息子のなかに自分を見、息子は父親の体温を感じ、バスケットは父子をつなぐ血脈となりつつあった。

振り返ってみて、ツボは一番の弱点を強みに変えた「リバウンド王」だった。周囲から「役に立たぬやっかいもの」という評価を集めた彼の弱点が、ヒーローになる強みに変わったのだ。まるで桜木花道のような変身は、それまで気付きもしなかった「仲間から頼りにされ、必要とされ、任された体験」に思い至り、自分の役割を考えることによって可能になったのだと思う。それは、かつて自分の気持ちとは関係なく突き放されたり哀れまれたりした生活にはないものだった。

寮長のリバウンドを取り損ねたことは、この家族に一本の斜交いを入れるいい機会になったと思うが、最後まで見届けることはせず、後は父親に任せた。そのことを通じて、父親自身のストーリーも変わっていくことを期待して。